

## 社会思想史学会第35回大会 セッション「一九六八年と出来事の哲学」報告

世話人：佐藤嘉幸（筑波大学）

発表者：箱田徹（立命館大学ポストドクトラル・フェロー）、佐藤嘉幸

ディスカッサント：小泉義之（立命館大学）

本セッションの目的は、フランスにおける一九六八年五月の社会変革運動（以下、六八年五月と表記する）が、ミシェル・フーコー、ジル・ドゥルーズらのポスト構造主義哲学に与えた影響を、「出来事」という概念から考察することである。

まず、箱田は「六八年五月」とフーコーの出来事概念——『知の考古学』と現在の出来事化」という発表を行い、フーコーにおける出来事概念について検討した。箱田によれば、フーコーは『知の考古学』（一九六九年）において、出来事という概念を一般的な歴史記述が用いる「事件」という意味から切り離し、政治的実践と緊密に関係した言説（「言説実践」）とともにある概念として取り出している。そのような視点こそ、知・権力という一九七〇年代以後のフーコーの権力理論の展開を準備するものである。また、一九七〇年代末に書かれた一連のテキストにおいては、出来事による理念の生産（状況に対する「耐え難さ」という感覚の生産）という視点が、「いま・ここ」の状況を診断する「現在性の哲学」というフーコー固有の哲学と接合されるような仕方で提示されている。

続いて佐藤は「経験的出来事と超越論的出来事——ドゥルーズと一九六八年五月」という発表を行い、「六八年五月は起こらなかった」、『意味の論理学』、『アンチ・エディプス』から、ドゥルーズにおける出来事概念について検討した。ドゥルーズにとって六八年五月とは、歴史法則からの逸脱、その切断としての出来事の生起である。それは状況に対する「耐え難さ」の感覚と新たな「可能なもの」を生産し、その結果として主体性＝主観性の生成変化をもたらす。『意味の論理学』における出来事概念は、六八年五月のような経験的出来事と区別される超越論的出来事（主体性＝主観性の生成変化）を指示しており、それは意味、特異性の生成を意味している。そこから、『意味の論理学』とは、（六八年五月のような）経験的出来事の効果として、超越論的領野に新たな複数の特異性が生産される過程を描き出した書物だと考えることができる。さらに、フェリックス・ガタリとともに書かれた『アンチ・エディプス』は、とりわけ主体の脱服従化（従属集団を主体集団へと変容させること）を通じて、経験的出来事（社会革命）と超越論的出来事（複数の特異性の生産）の同時的な生成を目指している。

二つの発表に続いて小泉は、次のような興味深い指摘を行い、発表を補足する視点を提示した。まず、運動と出来事を区別することが必要である。運動とは社会運動、革命運動であり、出来事とは革命そのものを指す。二つの概念の区別を通じて、いかなる運動が革命という出来事を生み出しかを検討しなければならない。そこから、佐藤の発表について以下の指摘がなされた。発表では「歴史」という概念を単に経験的な概念として捉えているが、「歴史」とはそもそも最初から超越論的な概念ではないのか。また、ドゥルーズ＝ガタリが「六八年五月は起こらなかった」と述べる時、革命はいまだ起きておらず、したがって「来るべきもの」とあるという含意があるのではないか。箱田の発表については以下の指摘がなされた。フーコーにとっての六八年五月は、マイノリティの運動につながっていく（同性愛解放運動、監獄情報グループのような実践を参照）。そうした文脈から、フーコーが晩年に注目したカント「啓蒙とは何か」について考えるなら、カントの言う「未成年状態」とは、病人、狂人を含意しているのではないか。最後に

小泉は、バディウの思想を参照しつつ次のように述べた。六八年五月の出発点であった学生運動を文化革命であると考えれば、それは続いて社会革命、さらには政治革命へとつながっていくと考えられていた。そのとき、とりわけ革命運動における党派（スターリン主義）と内ゲバの問題について考えなければならないだろう。これらの指摘に続いてフロアからは、対象をフランスのみに限定せずより広い視点で考えればどのようなようになるのか、また六八年五月の現実のプロセスに対する視点が足りないのではないかといった指摘がなされた。

これらの論点に関して、報告者は次のように応答した。箱田は「一九六八年五月」とは、発表の中で提示したように、一九六八年五月～六月という歴史上のイベントのことではなく、アルジェリア戦争からミッテラン政権誕生までを含む三十年近い時期区分として捉えていることを確認した。またフーコーの一九七〇年代以降の議会外左翼の運動、とくにテロリズムに関する批判的立場は、一九七〇年代末の講義録『安全・領土・人口』と『生政治の誕生』で提示される統治性論（国家論）の試みの中に見てとれると指摘した。しかし同時に「二つの全体主義」（スターリニズムとナチズム）を批判するフーコーの立場が、左翼内部のリベラル化に棹を差すことにもつながる両義性を持っていたという事実をどう考えるかという課題は残るとした。佐藤は、スターリン主義（左翼運動内部におけるマイクロ・ファシズムや抑圧性）の問題は、バディウとジジェクが確認するように、一九六八年以後の左翼にとって最重要な問題であり、ドゥルーズ＝ガタリが従属集団の主体集団への変容という主題によって提示しようとしたのは、まさしくその問題であると主張した。

（佐藤嘉幸・箱田徹）